

4. 頸髄損傷者のための卓球部活動に関するアンケート調査

自立支援局 第二自立訓練部 肢体機能訓練課

池田竜土、新津貴史、橋本珠美、安原裕美

おうちの診療所目黒 大野洋平

医療法人社団忠医会 大高病院 中川昌樹

自立支援局 芳賀信彦

【背景】

当センターでは、障害を持つ利用者がスポーツに取り組める環境が整備され、利用者が主体となって様々なスポーツの部活動が行われている。車椅子卓球は、パラリンピック競技大会の種目になっており、頸髄損傷者が該当するクラスが存在する。また、接触や落車などの危険が少なく、年齢を問わず障害者が取り組みやすいスポーツである。我々は、2020年12月から卓球に興味がある自立支援局利用者とともに卓球部の活動を開始した。支援者は医師と療法士、参加者は車椅子を使用する頸髄損傷者が中心である。特徴は、上肢機能障害があっても参加できるよう個別に対応することである。本研究では、支援内容の検証や満足度調査等のアンケート調査を実施し、その結果を分析することとした。

【目的】

本研究の目的は、参加者に対してアンケート調査を行い、適切な支援内容の検証や余暇活動としての継続意欲等の情報を収集・解析することで、頸髄損傷者の卓球競技における適切な指導方法や退所後の余暇活動継続への効果を検証することである。

【方法】

当センターで行われている卓球部活動に参加して1か月以上経った頸髄損傷者に対して、障害者スポーツへの認識の変化や余暇活動としての継続意欲、満足度等のアンケート調査を行う。

【結果】

対象者は11名で、回答率73%であった。参加者の年齢は18歳以上から59歳以下で偏りはなく、参加のきっかけは、利用者に誘われたという方が75%と多かった。参加してからの期間は、半数以上が7か月以上であった。退所後も卓球を続けたいかという項目では、62%が練習場所に通えるなら趣味として卓球を続けたいと回答し、満足度の項目では、不満を感じている方はいないという結果であった。また、自由記載の項目では、部活動が利用者間や健常者との交流ができる良い機会であることや自分の手がどこまで届くのか分かったなど身体機能面での良い効果を感じていることが明らかになった。

【考察】

上肢機能障害への個別対応を工夫しながら支援し、活動への満足度が概ね高い結果となった。参加者の年齢に偏りがなく、半数以上が練習場所に通えるなら趣味として卓球を続けたいと回答しており、退所後の余暇活動継続への効果が示唆された。本部活動においては、支援者も車椅子に乗ってプレーし、利用者と一緒に練習方法やプレースタイルを模索している。健常者とはほぼ同じ環境やルールで楽しめるスポーツを障害者に普及させることは、共生社会の構築に繋がる一つの要素であると考えられる。